

杏林大学医学部 数学

2022年 1月21日実施

I

(1) 三角関数について、次の関係式が成り立つ。

$$\cos 2\theta = \boxed{\text{アイ}} \sin^2 \theta + \boxed{\text{ウ}},$$

$$\sin 3\theta = \boxed{\text{ウエ}} \sin^3 \theta + \boxed{\text{カ}} \sin \theta.$$

(2) $0 \leq \theta < 2\pi$ のとき、関数

$$y = -\frac{1}{12} \sin 3\theta + \frac{3}{8} \cos 2\theta - \frac{3}{4} \sin \theta$$

は、 $\theta = \frac{\boxed{\text{キ}}}{\boxed{\text{ク}}} \pi$ で最小値 $\frac{\boxed{\text{ケコ}}}{\boxed{\text{サシス}}}$ をとり、 $\sin \theta = \frac{\boxed{\text{セソ}}}{\boxed{\text{タ}}}$ のとき最大値 $\frac{\boxed{\text{チツ}}}{\boxed{\text{テト}}}$ をとる。また、 y

の極値を与える θ の個数は $\boxed{\text{タ}}$ である。

解答

(1) 倍角公式および3倍角公式の導出過程は次のとおりである。

$$\begin{aligned}
 \cos 2\theta &= \cos(\theta + \theta) \\
 &= \cos \theta \cos \theta - \sin \theta \sin \theta \quad (\because \text{加法定理}) \\
 &= (1 - \sin^2 \theta) - \sin^2 \theta \\
 &= -2 \sin^2 \theta + 1 \\
 \sin 3\theta &= \sin(2\theta + \theta) \\
 &= \sin 2\theta \cos \theta + \cos 2\theta \sin \theta \quad (\because \text{加法定理}) \\
 &= (\sin \theta \cos \theta + \cos \theta \sin \theta) \cos \theta + (-2 \sin^2 \theta + 1) \sin \theta \quad (\because \text{加法定理}) \\
 &= 2 \sin \theta (1 - \sin^2 \theta) + (-2 \sin^2 \theta + 1) \sin \theta \\
 &= -4 \sin^3 \theta + 3 \sin \theta
 \end{aligned}$$

(2) (1) より

$$\begin{aligned}
 y &= -\frac{1}{12}(-4 \sin^3 \theta + 3 \sin \theta) + \frac{3}{8}(-2 \sin^2 \theta + 1) - \frac{3}{4} \sin \theta \\
 &= \frac{1}{3} \sin^3 \theta - \frac{3}{4} \sin^2 \theta - \sin \theta + \frac{3}{8}
 \end{aligned}$$

y を θ で微分すると

$$\begin{aligned}
 y' &= \sin^2 \theta \cos \theta - \frac{3}{2} \sin \theta \cos \theta - \cos \theta \\
 &= \frac{1}{2} \cos \theta (2 \sin \theta + 1)(\sin \theta - 2)
 \end{aligned}$$

したがって、 $0 \leq \theta < 2\pi$ における増減は次のようになる。

θ	0	...	$\frac{1}{2}\pi$...	$\frac{7}{6}\pi$...	$\frac{3}{2}\pi$...	$\frac{11}{6}\pi$...	(2π)
y'		-	0	+	0	-	0	+	0	-	
y	$\frac{3}{8}$	\searrow	$-\frac{25}{24}$	\nearrow	$\frac{31}{48}$	\searrow	$\frac{7}{24}$	\nearrow	$\frac{31}{48}$	\searrow	$\left(\frac{3}{8}\right)$

よって、 $\theta = \frac{1}{2}\pi$ で最小値 $\frac{-25}{24}$ をとり、 $\theta = \frac{7}{6}\pi, \frac{11}{6}\pi$ 、すなわち $\sin \theta = \frac{-1}{2}$ で最大値 $\frac{31}{48}$ をとる。
 また、 y の極値を与える θ の個数は 4 である。

(参考) (2) は $\sin \theta = t$ ($-1 \leq t \leq 1$) と置換するのが計算が早い。最後に y の極値を与える θ の個数を答えさせているので、上記では都合上置換せずに微分した。

II

ツ の解答は該当する解答群から最も適当なもの一つ選べ。

自然対数の底を e として、以下の間に答えよ。

(1) C を積分定数として、指数関数と単項式の不定積分について、次式が成り立つ。

$$\int xe^{-3x} dx = - \left(\frac{\text{ア}x + \text{イ}}{\text{ウ}} \right) e^{-3x} + C$$

$$\int x^2 e^{-3x} dx = - \left(\frac{\text{エ}x^2 + \text{オ}x + \text{カ}}{\text{キク}} \right) e^{-3x} + C$$

また、定積分について、

$$\int_0^1 |(9x^2 - 1)e^{-3x}| dx = \frac{1}{\text{ケ}} \left(-1 + \text{コ} e^{\text{サシ}} - \text{スセ} e^{-3} \right)$$

が成り立つ。

(2) p, q, r を実数の定数とする。関数 $f(x) = (px^2 + qx + r)e^{-3x}$ が $x = 0$ で極大、 $x = 1$ で極小となるための必要十分条件は、

$$p = \text{ソタ}, q = \text{チ}, r = \text{ツ}$$

である。さらに、 $f(x)$ の極小値が -1 であるとする、 $f(x)$ の極大値は $e^{\frac{\text{テ}}{\text{ト}}}$ となる。このとき、

$$\int_0^1 f(x) dx = \frac{\text{ナ}}{\text{ニ}}$$

ツ の解答群

- ① $r > 0$ ② $r = 0$ ③ $r < 0$ ④ $r > 1$ ⑤ $r = 1$
 ⑥ $r < 1$ ⑦ $r > \frac{1}{3}$ ⑧ $r = \frac{1}{3}$ ⑨ $r < \frac{1}{3}$

解答

(1) 部分積分法を用いると

$$\begin{aligned} \int xe^{-3x} dx &= \int x \left(\frac{e^{-3x}}{-3} \right)' dx \\ &= x \cdot \frac{e^{-3x}}{-3} - \int 1 \cdot \frac{e^{-3x}}{-3} dx \\ &= -\frac{xe^{-3x}}{3} - \frac{e^{-3x}}{9} + C \\ &= - \left(\frac{3x + 1}{9} \right) e^{-3x} + C \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 \int x^2 e^{-3x} dx &= \int x^2 \left(\frac{e^{-3x}}{-3} \right)' dx \\
 &= x^2 \cdot \frac{e^{-3x}}{-3} - \int 2x \cdot \frac{e^{-3x}}{-3} dx \\
 &= -\frac{x^2 e^{-3x}}{3} + \frac{2}{3} \int x e^{-3x} dx \\
 &= -\frac{x^2 e^{-3x}}{3} + \frac{2}{3} \left(-\frac{3x+1}{9} e^{-3x} \right) + C \\
 &= -\left(\frac{9x^2 + 6x + 2}{27} \right) e^{-3x} + C
 \end{aligned}$$

また, $9x^2 - 1 \geq 0 \iff x \leq -\frac{1}{3}, \frac{1}{3} \leq x$ より

$$\begin{aligned}
 \int_0^1 |(9x^2 - 1)e^{-3x}| dx &= \int_0^1 |9x^2 - 1| e^{-3x} dx \\
 &= \int_0^{\frac{1}{3}} -(9x^2 - 1)e^{-3x} dx + \int_{\frac{1}{3}}^1 (9x^2 - 1)e^{-3x} dx \\
 &= \int_0^{\frac{1}{3}} (-9x^2 e^{-3x} + e^{-3x}) dx + \int_{\frac{1}{3}}^1 (9x^2 e^{-3x} - e^{-3x}) dx \\
 &= -9 \left[-\left(\frac{9x^2 + 6x + 2}{27} \right) e^{-3x} \right]_0^{\frac{1}{3}} + \left[\frac{e^{-3x}}{-3} \right]_0^{\frac{1}{3}} + 9 \left[-\left(\frac{9x^2 + 6x + 2}{27} \right) e^{-3x} \right]_{\frac{1}{3}}^1 - \left[\frac{e^{-3x}}{-3} \right]_{\frac{1}{3}}^1 \\
 &= \frac{1}{3} (-1 + 8e^{-1} - 16e^{-3})
 \end{aligned}$$

(2) 条件より, $f'(0) = 0$, かつ $f'(1) = 0$ が必要である. $f'(x) = \{-3px^2 + (2p - 3q)x + q - 3r\}e^{-3x}$ であるから

$$\begin{aligned}
 f'(0) = 0, \text{ かつ } f'(1) = 0 &\iff q - 3r = 0, \text{ かつ } (-p - 2q - 3r)e^{-3} = 0 \\
 &\iff p = -9r, \text{ かつ } q = 3r
 \end{aligned}$$

このとき, $f'(x) = 27rx(x-1)e^{-3x}$ であるから, $f(0)$ が極大値, $f(1)$ が極小値となるとき, $r > 0$ である. よって, 求める必要十分条件は

$$p = -9r, \text{ かつ } q = 3r, \text{ かつ } r > 0$$

さらに, $f(x) = (-9r^2x + 3rx + r)e^{-3x}$ より

$$f(1) = -1 \iff -5re^{-3} = -1 \iff r = \frac{e^3}{5}$$

であるから

$$f(0)(= r) = \frac{e^3}{5}$$

ここで

$$\begin{aligned}
 \int_0^1 f(x) dx &= \int_0^1 r(-9x^2 + 3x + 1)e^{-3x} dx \\
 &= r \int_0^1 (-9x^2 + 3x + 1)e^{-3x} dx
 \end{aligned}$$

であり, (1) より

$$\begin{aligned}\int_0^1 (-9x^2 + 3x + 1)e^{-3x} dx &= \int_0^1 (-9x^2 e^{-3x} + 3x e^{-3x} + e^{-3x}) dx \\ &= \left[-9 \left(-\frac{9x^2 + 6x + 2}{27} \right) e^{-3x} + 3 \left(-\frac{3x + 1}{9} \right) e^{-3x} + \frac{e^{-3x}}{-3} \right]_0^1 \\ &= 4e^{-3}\end{aligned}$$

よって

$$\int_0^1 f(x) dx = r \cdot 4e^{-3} = \frac{e^3}{5} \cdot 4e^{-3} = \frac{4}{5}$$

III

~ , および ~ の解答を該当する解答群から最も適当なものを一つずつ選べ.

(1) 座標平面上の 3 点 $A(-1, 0)$, $B(1, 0)$, C を頂点とする三角形について考える. 点 C の y 座標は正であり, 原点を O として, 以下の問いに答えよ.

(a) $\angle BAC < \angle ABC$ を満たす場合, 点 C は第 象限に存在する.

(b) $\angle ABC < \angle ACB$ を満たす場合, 点 C は の に存在する.

(c) $\angle ACB < \frac{\pi}{2}$ を満たす場合, 点 C は の に存在する.

(d) $\angle BAC \leq \angle ABC \leq \angle ACB \leq \frac{\pi}{2}$ を満たす点 C が存在する領域 (境界を含む) の面積は

$$\frac{\text{カ}}{\text{キク}} \pi - \frac{\sqrt{\text{ケ}}}{\text{コ}}$$

である.

, の解答群

- ① 点 A を中心とし点 B を通る円
- ② 点 B を中心とし点 A を通る円
- ③ 線分 AB を直径とする円
- ④ 離心率が 0.5 で 2 点 O, A を焦点とする楕円
- ⑤ 離心率が 0.5 で 2 点 O, B を焦点とする楕円
- ⑥ 離心率が 0.5 で 2 点 A, B を焦点とする楕円
- ⑦ 線分 AB を一辺にもち, 重心の y 座標が正である正三角形
- ⑧ 線分 AB を一辺にもち, 重心の y 座標が正である正方形

, の解答群

- ① 内部
- ② 周上
- ③ 外部
- ④ 重心

(2) 座標空間内の 4 点 $A(-1, 0, 0)$, $B(1, 0, 0)$, $C(s, t, 0)$, D を頂点とし,

$$\angle BAC < \angle ABC < \angle ACB$$

を満たす四面体を考える. $t > 0$ であり, 点 D の z 座標は正であるとして, 以下の問いに答えよ.

(a) $\angle ADC = \frac{\pi}{2}$ を満たす場合, 点 D は に存在する.

(b) $\angle ADC = \angle BDC = \frac{\pi}{2}$ を満たす場合, 点 D の x 座標は s であり, 点 D は $(s, \text{シ}, 0)$ を中心とする半径 の円周上にある.

(c) 以下では, $t = \frac{4}{3}$ とする. 設問 (1) の結果から, 点 C の x 座標 s は,

$$\text{セ} < s < -\text{ソ} + \frac{\text{タ} \sqrt{\text{チ}}}{\text{ツ}}$$

の範囲の値をとる. この範囲で s が変化するとき, $\angle ADB = \angle ADC = \angle BDC = \frac{\pi}{2}$ を満たす四面体 $ABCD$

の体積は、 $s = \frac{\boxed{\text{テ}}}{\boxed{\text{ト}}}$ のとき最大値 $\frac{\boxed{\text{ナ}}}{\boxed{\text{ニ又}}}$ をとる.

サ の解答群

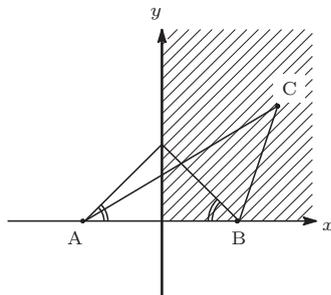
- ① 線分 AC の中点を通り直線 AC に垂直な平面上
- ② 線分 AC を直径とする球面上
- ③ 線分 AC を直径とする球の内部
- ④ 点 A を中心とし点 C を通る球面上
- ⑤ 点 A を中心とし点 C を通る球の内部
- ⑥ 線分 AC を一辺にもつ正四面体の面上
- ⑦ 線分 AC を一辺にもつ正四面体の内部
- ⑧ 離心率が 0.5 で 2 点 A, C を焦点とする楕円を直線 AC のまわりに 1 回転させてできる立体の面上
- ⑨ 離心率が 0.5 で 2 点 A, C を焦点とする楕円を直線 AC のまわりに 1 回転させてできる立体の内部

シ, **ス** の解答群

- ① s
- ② t
- ③ $2s$
- ④ $2t$
- ⑤ $\frac{s}{2}$
- ⑥ $\frac{t}{2}$
- ⑦ st
- ⑧ $\frac{s}{t}$
- ⑨ $\frac{s+1}{2}$
- ⑩ $\frac{s-1}{2}$

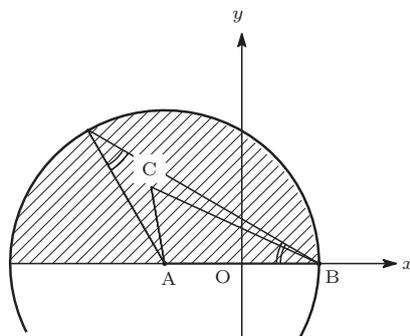
解答

(1) (a)



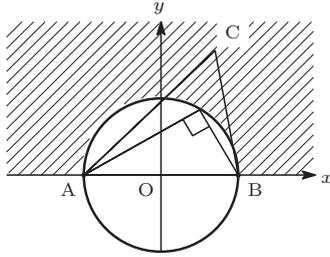
$\angle BAC < \angle ABC$ が成り立つとき、点 C は線分 AB の垂直二等分線に関し、点 B と同じ側に存在する。
点 C の y 座標が正であることにも注意すると、点 C は第 1 象限に存在する。

(b)



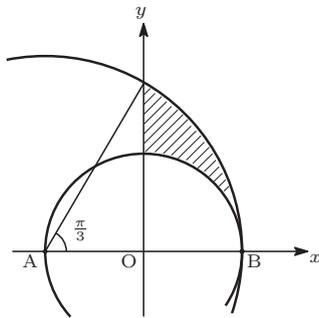
$\angle ABC < \angle ACB$ が成り立つとき、点 C は $AC < AB$ を満たすので、点 C は点 A を中心とし点 B を通る円周 (1) の内部 (1) に存在する。

(c)



$\angle ACB < \frac{\pi}{2}$ が成り立つとき、点 C は AB を直径とする円 (3) の外部 (3) に存在する。

(d) (a)(b)(c) より、 $\angle BAC \leq \angle ABC \leq \angle ACB \leq \frac{\pi}{2}$ を満たす点 C の存在領域は次の図の斜線部 (境界を含む)。



したがって、その面積は

$$2^2\pi \times \frac{1}{6} - \left(1^2\pi \times \frac{1}{4} + \frac{1}{2} \times 1 \times \sqrt{3} \right) = \frac{5}{12}\pi - \frac{\sqrt{3}}{2}$$

(2) 点 D(x, y, z) (z > 0) とする。

(a) $\angle ADC = \frac{\pi}{2}$ が成り立つとき、点 D は AC を直径とする球面上に存在する (2)。

(b) $\angle ADC = \angle BDC = \frac{\pi}{2}$ を満たすとき、

$$\begin{cases} \vec{AD} \cdot \vec{CD} = 0 \\ \vec{BD} \cdot \vec{CD} = 0 \end{cases}$$

$$\begin{cases} (x+1, y, z) \cdot (x-s, y-t, z) = 0 \\ (x-1, y, z) \cdot (x-s, y-t, z) = 0 \end{cases}$$

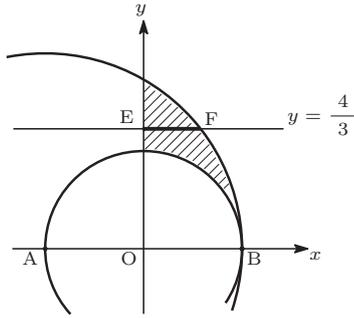
$$\begin{cases} (x+1)(x-s) + y(y-t) + z^2 = 0 \\ (x-1)(x-s) + y(y-t) + z^2 = 0 \end{cases}$$

$$\begin{cases} x = s \\ y(y-t) + z^2 = 0 \end{cases}$$

$$\begin{cases} x = s \\ \left(y - \frac{t}{2} \right)^2 + z^2 = \frac{t^2}{4} \end{cases}$$

したがって、点 D は x 座標が s で、 $\left(s, \frac{t}{2}, 0 \right)$ (6) を中心とする半径 $\frac{t}{2}$ (6) の円周上にある。

(c) (1)と $t = \frac{4}{3}$ から, 点 C の存在する範囲は次の図の線分 EF 上である.



点 F の x 座標は, 円 $(x+1)^2 + y^2 = 4$ と $y = \frac{4}{3}$ を連立して, $x = -1 + \frac{2\sqrt{5}}{3}$

よって, 点 C の x 座標 s の取りうる値の範囲は

$$0 < s < -1 + \frac{2\sqrt{5}}{3}$$

である.

四面体 ABCD の体積 V は

$$\begin{aligned} V &= \frac{1}{3} \triangle ABC \times z \\ &= \frac{1}{3} \times \frac{1}{2} \cdot 2 \cdot t \times z \\ &= \frac{t}{3} z \end{aligned}$$

であるから, V が最大となるのは z が最大するときである.

$\angle ADB = \frac{\pi}{2}$ より点 D は AB を直径とする球面上あり,

$\angle ADC = \angle BDC = \frac{\pi}{2}$ のとき点 D は (b) の条件を満たすから

$$\begin{cases} x^2 + y^2 + z^2 = 1 \\ x = s \\ y(y-t) + z^2 = 0 \end{cases}$$

を満たす. よって,

$$y = \frac{1-s^2}{t}$$

であり,

$$\begin{aligned} z &= \sqrt{y(t-y)} \\ &= \sqrt{\frac{1-s^2}{t} \left(t - \frac{1-s^2}{t} \right)} \\ &= \frac{1}{t} \sqrt{u(t^2-u)} \quad (1-s^2 = u \text{ とおいた}) \\ &= \frac{1}{t} \sqrt{-u^2 + t^2 u} \\ &= \frac{1}{t} \sqrt{-\left(u - \frac{t^2}{2}\right)^2 + \frac{t^4}{4}} \end{aligned}$$

であるから,

z は $u = \frac{t^2}{2} = \frac{8}{9}$, すなわち $s = \frac{1}{3}$ のときに最大値 $\frac{t}{2} = \frac{2}{3}$ をとる.

よって、 V は $s = \frac{1}{3}$ のとき最大値 $\frac{8}{27}$ をとる.

講評

I [三角関数, 微分法 (数Ⅱ)] (易)

三角関数と微分法 (数Ⅱ) の基本問題。三倍角の公式は必須である。今後の入試でも必ず出てくる公式である。

II [積分法 (数Ⅲ)] (やや易)

部分積分をしっかりとできるか、そして絶対値を含む定積分の処理ができるかを問う基本問題。計算がやや煩雑であるが、1次合格のためには絶対に落とせない問題である。

III [平面図形, 空間図形] (やや難)

杏林らしい図形と絡んだ問題であり、時間制限を考えると、厳しかったかもしれない。前半の平面図形部分をどれだけとれるかがポイントである。後半の空間図形をとれる受験生はかなり力があると判断される。

大問1と大問2で満点をしっかりとれるかどうかで1次の合否が決まる可能性がある。大問3を取れなかったとしても諦める必要はないと思われる。一次突破ラインは60%前後だろう。

LINE 登録で全教科配信!

本解答速報の内容に関するお問合せは…

YMS ☎03-3370-0410 まで

医学部進学予備校 **メビオ**
☎ 0120-146-156 <https://www.mebio.co.jp/>

医学部専門予備校
YMS
heart of medicine
☎ 03-3370-0410 <https://yms.ne.jp/>

医学部専門予備校
英進館メビオ 福岡校
☎ 0120-192-215 <https://www.mebio-eishinkan.com/>



▲LINE 登録はこちらから